

上田良二先生の思い出

朽津耕三 (城西大学理学部化学科)

上田先生のお名前を初めて知ったのは、1950年4月に東京大学理学部化学科の森野米三先生の研究室で卒業研究を始めた直後のことだった。与えられたテーマは「気体電子回折による分子構造の研究」であり、私の机の脇には装置が置かれていた。森野先生はその一年あまり前に名古屋から転任されたばかりで、この装置は、先生と一緒に赴任された岩崎万千雄助手が運び込んで組立て直したものであった。しかし、私を直接に指導して下さるはずだった岩崎さんは病気のため既に名古屋に帰られたあとで、私は孤児のような状態になった。そこで、森野先生のご配慮で私は名大に何度か内地留学する機会を与えられ、上田先生・木村雅男さんをはじめ5・6号館の先輩諸兄から懇切なご指導を頂くことができた。さらに、何年もあと前後2回にわたって同金工室で新しい設計のもとに製作して頂いたセクター装置2台の組立・調整についても、名古屋に赴いて終始お世話になった。5号館脇の空き地で昼休みに上田研や金工室の方々とソフトボールを楽しんだことを懐かしく思い出す。

このような訳で、私は上田先生の「学問上の甥」に等しい存在である。私にとって、「父」の森野先生と「叔父」の上田先生という優れた研究者の友情を学生時代に間近に見聞できたことは、その後の私の研究姿勢を決定するほど貴重な経験だった。その研究交流の深さについて、お二人は晩年にそれぞれ次のように述懐しておられる。

(森野先生の追想[1]から：途中の一部省略)「昭和18年、私は当時新設された名大理学部に移ることとなったが、たまたまその物理教室には上田良二さんが先に着任されていて、結晶の電子回折の研究を精力的に発展されていた。気体電子回折の研究を提案したところ、大変乗り気になっていただき、ズブの素人の私達に、研究の指導ばかりでなく、第1号装置を作って提供していただいた。やっと研究が軌道に乗ったと思った昭和23年、私は東京に戻るることとなった。私は気体電子回折装置1台を携えて東京に戻った。我々が比較的短日月で世界の仲間に加わることができたのは、一にかかって上田さんの心からなる協力の賜であった。.....上田さんには、装置の設計・製作につき多大のお世話になったことは既に述べた通りである。しかも、その装置の製作から十余年を経過した頃になって、上田さんから『第1号機も古くなったから、この間の体験を取り入れてもう一度装置を作り直しては』との提案を頂き、金工室の高橋さんの努力で、最高の性能を持つ装置を作っていただいた。私達の研究に対する寛大な御厚意には全く頭の下がる思いである。」

(上田先生の追憶[2]から：途中の一部省略)「名大理学部創設(1942年)の初顔合せで、私は森野さんと気体電子回折の協同研究を約束した。そして森野さんの赴任以前に第1号機を完成し、赴任と同時に木村さんが実験を開始した。

1993年9月3日付けで、森野さんから丁寧なお手紙と別刷り[1]を頂いた。その中に私のことが詳しく書かれている。私の小さな協力を大きく評価していただいて、この上なく嬉しく、光栄と感激した。顧みると、二人が名古屋で共に暮らしたのはわずかに5年だった。しかし、二人の間には最後まで爽やかな風が行き交った。私は森野先輩の才能と人格を尊敬し、森野さんは私の自主性を愛して下さった。」

気体電子回折の協同研究をめぐる上田先生の追想は、さらに「雑文抄[3]」にも見られ、またお二人の追想は英文でもそれぞれ克明に記録されている[4]。

上田先生から親しく個人的にご指導を頂いたのは、上記のほかに、国際結晶学連合 IUCr で加藤範夫先生を引き継いで理事会に参加したとき(1975-78)と電子回折委員会の委員長を勤めたとき(1977-81)であった。思案に余る難問に直面したとき、私はまず上田先生にお電話でご相談し、ときにはご自宅までお邪魔して、いつも適切にご指導を頂いた。特に1977年から81年にかけて電子回折50年を記念する出版物[4]の編集計画が IUCr で進められたとき、上田先生は諸外国のお友達と詳しく相談され、推進力としてこの計画を実現された。私も IUCr の委員長として事務的なご協力をさせて頂く喜びを味わった。このあたりの事情は、同書の編者 Peter Goodman の序文に明記されている。また先生は、ご自身の40年にわたるご研究の中から「七つの話題」を寄稿しておられる。

上田先生から、私はもう一つ大きな学恩を受けている。それは論文の書き方についての教訓である。「西川先生の論文校訂[5]」に出会って「襟を正す思い」を味わったのは、1961年に助手から講師に昇任して、ちょうど後輩の研究指導を始めようとする頃だった。先生のこの一文は、それから現在まで、著作だけでなく講演から講義にいたるまで、学問的発表をするときの心構えに関して最高の指針となっている。私はこの一文を読むことを無数の後輩や学生たちにも勧めてきた。自然科学の姿、研究・教育の在り方、学術情報交流の状況は半世紀あまりの間に大きく変わったが、古今東西を通じて変わらない学問の心髄をこの文章の中に垣間見る思いがする。

先生と最後にお目にかかったのは、1996年6月1日夜、森野先生追悼会のときであった。名古屋からはるばるお越し下さった先生のご厚情に対して森野令夫人のお喜びは大きかった。私も胸の熱くなる思いがした。先生から頂いた学恩に厚くお礼申し上げ、ご冥福を心からお祈りしてやまない。

[1] 森野米三、「分子構造研究の思い出」, 学術月報(日本学術振興会), 46, 712 (1993).

- [2] 上田良二,「森野米三先生を偲ぶ」, 森野米三先生追悼記念事業会(非売品)(1997),
p. 38.
- [3] 上田良二,「電子回折四十年」, 雑文抄 (1982), p. 162.
- [4] *Fifty Years of Electron Diffraction*, ed. P. Goodman, (Reidel,
Dordrecht, 1981).
- [5] 上田良二,「Journal の論文をよくするために」, 日本物理学会誌, 16, 345
(1961); 上田良二, 雑文抄 (1982), p. 71.